

自然の営みを体験

日本最初の国設野鳥の森となった軽井沢町星野の「軽井沢野鳥の森」で、ピッキオが開くネーチャーツアーを体験した。

ミスナラやカラマツが茂る100畝の森。葉巻状の奇妙な木の葉が歓迎してくれた。長さ3センチほどであちこちに落ちていた。森の案内人、柳原千穂さん(29)は「オトシブミという虫の作業です」と説明すると、「これからクマがいる森にお邪魔しますから」と鈴を身に着けた。

命のつながりを実際に見て

柳原千穂さん・森の案内人

「命のつながりを実際に見て」といふのは、水洗いをとらえやすい形に変わって羽の汚れを落とし、次にワックスをかけて雨でも水をはじくようにする。盛りんにつついていたお尻の辺りには、ワックスに相当する油脂分が出てくる尾脂腺がある。「焼き鳥という『ほんじり』が、この尾脂腺にあたります」

クマが食べたというシシウドを横目に山道を登り、ドングリの形をした池に着いた。うようよいしたオタマジャクシの1匹を捕まえ、ルーペで下向きのおちよぼる。「命のつながりを実際

0267・45・7777。HPは<http://picchio.co.jp/sp>

然の不思議を伝え、ツアーを有問い合わせは電話

辻井 俊恵 (ビダフェリース1級建築士事務所所長——南箕輪村在住)



バラが花咲く今月14、15両日に、今年も我が家と庭を一般公開した。庭は約120本のバラと、宿根草を中心とした草花を立体的に組み合わせてある。オープンガーデンの来場者は2日間ではば千人だった。

心地よい空間、心地よい時間ってどんなもの？ そよ風に吹かれて木々の葉がささやく木陰で、小鳥がさえずり小川のせせらぎが聞こえ、ほのかに花々が香る。その中で、おいしいケーキを食べながらゆったりと過ごすティータイム。まるで小説に出てきそうな情景だけれど、なかなか現実にはなく、やっぱりあこがれ。

季節や自然を感じて過ごす空間を、そしてそんな空間で過ごす時間を、さびげなく日常の心

時計をはずして

自然と一体感味わうバラの庭

とコマに取り入れたい。そう思い、庭に手を加えるようになったのは、十数年前に家族でヨーロッパを旅行して庭で過ごす人々の姿を見てからのこと。

「仕事の合間に、このお庭で一息されるのですか」との質問をよく受ける。はい、と見えを張りたいたところだけれど、仕事に追われて、そんなに優雅じゃない。それならば、毎日の食事をとる場を、自然を感じられる空間にしたらいい。「あっ、あの花が咲きそう」「鳥が巣作りを始めた」と会話も弾む。

だから、うちのダイニングにはカーテンがない。食事をしながら窓から見える庭こそが自然のカーテンなのだから。天気の良い休日には、庭で昼飯。簡単な食事でもおいしいのは、五官で感じる自然が一番のごちそうだから！

テーブルといすが置き、木や花の屋根や「カーテン」があれば、狭い庭でも大丈夫。あこがれのひとときを身近に感じて欲しいとオープンガーデンも始めた。こんな体験から、敷地全体が住まいの空間とのコンセプトが生まれ、私はその中で仕事をしている。心地よい空間で過ごす時間を毎日に取り込もうと。

松本支部 1席「残月と北アルプス」六蔵義

全日写連

1席に六蔵さん

松本支部3月例会

- ①「残月と北アルプス」六蔵義
- ②「峠の赤地蔵」高山芳夫
- ③「雪国の夜明け」薄井尚介
- ④「雪山」鳥羽修
- ⑤「郷



愁」西村安子⑥
侯野浩久⑦「氷
浩⑧「飛沫」細
る湖畔」宮坂睦

【評】「残
ス」雪の北ア
月が昇りました
を薄紫のモノト

「命どろ

諏訪市在住の
報道カメラマン
ん(70)が21日、
講演会「命どろ
会場からあふれ
20人が話を聴
演題は、沖縄の
「宝」という意
は、沖縄戦と、
ンボジアなど外
のスライドを見

